“死にもの狂いで” 2017 07 02

マタイ 10:40-42 牧師　安達均

聖霊が人々の心に豊かに注がれますように！

私の親戚の結婚式が東京であり、休暇をいただき6月末は日本に行っていた。結婚する新郎新婦は昨年10月には婚約していた。その婚約時期から結婚式までの間に、新郎の母親にも大きな二つの変化がおこった。

彼女はここ数年の間、歩行が困難になってきており、車椅子の生活にならざるを得なくなり昨年のクリスマスから介護施設にお世話になることになった。そればかりではなく、１月にスーット洗礼を受けることを承諾して、洗礼を受けた。

そして、自分の息子の結婚式が近づいていたが、自分では結婚式に歩けないから行かないと話していた。ところが結婚式の数週間前に、自分で車いすのまま乗り降りできる介護タクシーを見つけ電話をして予約して、結局、結婚式に出席した。

結婚式当日、教会に到着した際は、牧師に対して「死にものぐるいで来ました。」と話していた。死にものぐるいの割りには、彼女の目は輝いており、きわめて表情はおだやかで困難を受け入れていた。その「死にものぐるい」という言葉を、彼女が洗礼をうけ、数ヶ月だけとはいえキリスト者となり社会生活を送ることになったことの証だと私は感じた。

本日の聖書箇所、マタイ１０章の最後は１２弟子を派遣する際のイエスの教えの結論部分である。イエスは派遣される弟子たちに、厳しい生き方を迫られると語っていた。与えられた箇所は４０節からだったが、その前の３９節には「自分の命を得ようとする者は、それを失い、わたしのために命を失う者は、かえってそれを得るのである。」と書いてあった。

だれが、自分から命を失おうなどするだろうかと思われてしまう。(もちろんここで文字通り解釈してイエスは特攻隊のようになりなさいということを話しているのではない。)　ただ、イエスの１２弟子たちは、ユダとヨハネ以外はみな殉教したとされている。なんらかの拷問などをうけ、きびしい処遇のなかで、命を失っていった。

現代において、イエスの弟子となったからといって肉体的な命を失い殉教するキリスト者は少ない。しかし、冒頭に話した新郎の母親が「死にものぐるい」と言ったこととも関係していると思う。20世紀21世紀を生きてきた、そして生きている私たちにとって、「命を失う者がそれを得る」とは、どういうことなのか考えてみたい。いったいどういうことなのだろうか？

杉原千畝氏という方がいた。ヨーロッパではじまった第二次世界大戦初期日本の外交官として、リトアニアの日本大使館員に派遣された。そこには多くのユダヤ人難民がいた。そのままではリトアニアでも起こったホーローコーストで命を失う運命にあった。

杉原氏はユダヤ人難民６０００人のために、ホーローコーストの虐殺から逃れロシア・日本を通って出国するためのビザを発行した。そのような行為は、ナチドイツとリトアニアが、ユダヤ人をかまうものたちも殺そうとして事実があり、とても危険な行為だった。　また日本の外務省からしても、日本・ドイツの関係上、好ましくない行為とされた。

彼は、激しい精神的な格闘があったが、自分の外務省としての立場、つまり職を失ってでも、また家族が収入がなくなり困ることになっても、ビザを記載し発行しつづけた。言うならば死をも覚悟、死にもの狂いで、大使館員の職にある限り、ビザ発行を継続した。

また杉原地畝について付け加えておきたい情報がある。メディアではほとんど知られていないことだが、彼は東京にあるロシア正教会の復活大聖堂で洗礼を受けたクリスチャンだった。

杉原地畝の妻、幸子氏は「私たちは難民を国外の脱出させるために、神に派遣された」と考えたそうだ。私は杉原氏が遭遇した状況は、イエスが、「命をうしなうものがそれを得る」といわれていたことと関係していたのだと思う。

洗礼を受けていた杉原には、聖なる霊がやどり、普通だったらとても決断できないような行動へと導いたのではないかと思う。私たちは、キリスト者として、日々、困難に囲まれるような生活に強いられているといっても過言ではない。しかしどんな状況におかれようが、神は恵み深く働いてくださり、義なる行動へと導いてくださる。そして、私たちは、希望がもて、そして神秘的な神のみ業に気づかされる。

第二次世界大戦終了後２年後彼は日本に帰国できたが、彼のとった行動は不適切とされ外交官の職は失い、ほかの仕事をさがさなければならなかった。戦後20年以上たった後だったが、助けられたユダヤ人が何人も杉原氏のことを語るものがおり、日本のイスラエル大使館は杉原が日本で生きているのを見出した。彼が1986年に86歳で天に召される一年前、イスラエル政府からは「諸国民の中の正義の人」とされ表彰された。

それ以来世間は杉原を受け入れ、また彼のとった行動を祝すようになる。ドキュメンタリ映画や彼のことを扱った記事、また本も出版されるようになった。

与えられた福音書では、イエスは弟子たちに「あなたがたを受け入れる人は、わたしを受け入れ、わたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのである。」話していた。　神が杉原地畝を派遣したことを考えるとき、この言葉は次のように言い換えることもできるのだと思う。「地畝を受け入れる者は、イエスを受け入れるのであり、イエスを受け入れる者は、イエスを送った全能なる父を受け入れる。」

私は地畝に限らず、この世に送られている多くのキリスト者は、死に物狂いになるような状況に派遣されており、その中で主が恵み豊かに働いてくださっている。主の御名において、キリストの恵みにまだ気づいていない方々が、キリスト者を通して、主の恵みに気がついて、主を受け入れるように願い祈ろう。アーメン